

氏名	清水 貴裕
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博乙第 2810 号
学位授与年月	平成 29年 1月 31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	催眠反応性の生起メカニズムに関する臨床社会心理学的研究

主査	筑波大学教授	博士（心理学）	沢宮容子
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	濱口佳和
副査	筑波大学助教	博士（心理学）	大谷保和
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	佐藤有耕

論文の内容の要旨

清水貴裕氏の博士学位論文は、被催眠者の催眠への反応しやすさである「催眠反応性」という概念を用い、「催眠反応性の生起メカニズム」について、臨床社会心理学的な観点から検討を加えたものである。その要旨は以下のとおりである。

第1章では、著者は本論文の研究背景として、催眠による心理臨床的援助につき先行研究に即してまとめている。著者は、催眠によって特定の意識状態が達成されるとは見なさず、催眠で生じる反応を被催眠者の目標志向的な行動とする社会認知的立場をとっている。この立場を踏まえ、著者は、「催眠者と被催眠者が催眠を行っているお互いに認識する状況において、被催眠者が催眠者から一連の誘導手続きを受け、行動や主観的体験の変化・変容を意図する暗示に対して反応することを求められ、被催眠者がそれに応じた反応や体験を示すこと」と催眠を定義している。

著者は、第2章において催眠反応性の生起要因に関する研究について、第3章において催眠状況個人内変数と催眠反応性に関する研究について概観している。さらに、第4章において、これまで

の催眠観研究の問題点を踏まえ、新たに催眠状態信念という概念を提示し、催眠状態信念による催眠反応性生起要因の統合的理解について論じている。

第5章では、本論文の目的について述べている。本論文の目的は、人々の有する催眠状態信念を明らかにし、催眠状態信念とこれまで個別に検討されてきた催眠反応性に関わる諸要因との関連について検討することで、催眠反応性の生起要因を統合的に理解することである。著者は、上記の目的を達成するために以下の小目的を設定した。(1) 催眠状態信念の概念的検討、(2) 催眠状態信念、感情的催眠態度および催眠反応性の関連、(3) 催眠予期、文脈効果における催眠状態信念の影響、(4) 催眠状態信念の形成要因と催眠反応性の関連の4つである。本論文は、これら4つの小目的の検討から催眠反応性の生起メカニズムを明らかにし、催眠を用いた心理臨床的介入をより効果的に行うための臨床社会心理学的な知見を提供したものである。

第6章では、人々の有する催眠状態信念について概念的検討を行い、4つのタイプの催眠状態信念について明らかにしている。第7章では、従来の催眠態度について、その認知的成分を催眠状態信念、感情的成分を感情的催眠態度と区別して捉え、それぞれが催眠反応性に及ぼす影響について検証している。第8章では、催眠予期および催眠状況における文脈効果に及ぼす催眠状態信念の影響について検討を加えている。第9章では、個々人の催眠状態信念の形成に影響している個人的背景として、自己受容および日常生活満足感との関連について明らかにしている。

第10章では、第1～9章の研究から得られた知見より、本論文で設定した4つの小目的について総合的考察を行っている。第一に、人々の有する催眠状態信念が従来考えられていたよりも広範であり、感情的催眠態度や催眠予期などに与える影響からは、4つの催眠状態信念が質的にも異なることを明らかにしている。第二に、従来の催眠態度を、催眠状態信念と感情的催眠態度に区別し、両者の関係について検討した結果、従来の催眠観研究で述べられてきたような、ステレオタイプの信念＝ネガティブな催眠態度ではないことを明らかにしている。第三に、催眠状態信念が催眠予期と催眠反応性との関連、没入性や心理的リアクタンス特性といった個人特性と催眠との関連づけに影響を及ぼし、催眠反応性の生起に関わっていることを明らかにしている。第四に、催眠状態信念の形成要因と催眠反応性との関連について検討した結果、催眠状態信念を個人の考えとして取り入れるかどうかには、個人的背景が影響しており、催眠状態信念の形成が主体的・能動的に行われていることを明らかにしている。また、こうした個人的背景から形成される催眠状態信念は、催眠暗示をどのように解釈するかにも影響を与える可能性があると論じている。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、催眠状態信念という従来の催眠観に代わる新しい概念を提示したことによって、これまで個別に検討されてきた催眠態度や催眠予期と催眠反応性との関連を統合的に示すことを可能にした。これにより、催眠観研究や催眠反応性の生起メカニズムについての理解を前進させたと評価できる。また、催眠予期と催眠反応性の調整変数として機能する催眠状態信念の役割のみならず、催眠予期との関連が指摘されてきた文脈効果についても、催眠状態信念が個人特性と催眠の関連づ

けに影響して生じていることを実証し、催眠予期の形成と文脈効果を催眠状態信念によって統一的に理解することを可能にした点は、今後の催眠研究に大きく寄与すると考えられる。本論文の知見を心理臨床実践につなげるためにも、催眠状態信念への介入が催眠反応性や催眠による治療的效果を高めることを実証するのが今後の課題とはなるが、被催眠者の目標志向的な行動として催眠反応性の生起メカニズムの統合的な理解を得ることができたことの学問的意義は大きい。

平成 28 年 11 月 2 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。